
～ 静寂司る魔神の手記 ～

天駆ける翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～ 静寂司る魔神の手記 ～

【Nコード】

N0688L

【作者名】

天駆ける翼

【あらすじ】

＊＊ この作品は『謳う丘 ～Salaverrhappianca～』の詩をもとに、オリジナルストーリーを補完つつ歌詞中の物語を小説化した歌詞小説です。 更新は不定期です ＊＊

魔神に守られて繁栄してきたレインタスという街に住む、神の歌姫
ラプランカと、騎士の少年 マオの物語。

プロローグ

そこは私たちとは違う法則の上に成り立つ世界

人の想いが力に変わる不思議な世界での物語

それは戦争の歴史、呪われた地をめぐる悲しい戦争の歴史

長きにわたる戦争で、彼の地は荒れ果て穢された

実りなく、枯れた大地でなおも戦争は続く

出口の見えない戦争に、一筋の光がさす

一人の魔導士の到来

その魔導士は神の加護をもって彼の地を救い、瞬く間に敵を壊滅

そして彼の地に勝利をもたらした

歓喜する民の前にて魔神は囁く

贄を捧げよ、さすれば汝らが民の繁栄を約束せん

民は魔人と契約し、かくて彼の地はかつての栄華を取り戻す

彼の地の名前はレレンタス

魔人祀りし民の住む、呪われし大地の物語

プロローグ（後書き）

今回のプロローグはちょっと変則的な感じになってしまいました。
でもこのような感じになっているのはこれが最後です。

次回からは私がいつも書いているような普通の小説の形式に戻りますので、御安心（？）ください。

それでは

『「謳う丘」静寂司る魔人の手記』 1人と999人の
戦争』

お楽しみくだ

さい。

第一話

「どうして！ どうして私なんですか！」

狭い部屋の中に少女の叫び声が響く。

少女の前には騎士の格好をした男達が四人立っており、彼女はそれの人たちにおびえている様子だった。いや、正確には騎士たちではなくこれから自分がたどるであろう運命に対してかもしれないが。

「仕方ないだろう、レレントスの平和を守るためには必要なことなのだ。わかってくれ」

四人の中で一番年上であろう男が一步前へ出て少女の問いに答える。

「いやです！ 行きたくない！ 生贄になんてなりたくない！ お願いです、何でも、何でもしますから、だから……助けて、お願いします！ お願い……」

目の前の騎士にしがみついて必死に訴えかける少女に、その男は感情のこもっていない視線を送る。

「残念だがその願いを聞き入れることはできない。これは古くからの街の掟だ。我々レレントスの民はそうやってこの街を守ってきたのだ」

感情のこもっていない、しかし芯の通った声で言い放つその男に、少女はたじろいてうつむく。

「そ、それは…… 私は、私は神の歌姫だから、行かなくちゃいけない。わかっています。今回はそれが私の番だということも、わかっています。……でも、それでも納得できるわけないじゃないですか！ 受け入れられるわけないじゃないですか！ どうしてだけ私がこんな思いをしなくちゃいけないの！！ ねえ、教えてよ！ どうして、どうして、私、なの……」

男の服をつかんだまま叫んでいた少女だったが、だんだんと言葉から覇気が失われていき 悲痛なつぶやきへと変わっていく。ついにはそのまま少女はずるずると力なく床に座り込んでしまう。すすり泣く少女の姿を見ても服を掴まれている男の表情に変化はなく、相変わらず感情のない目でただ少女を眺めているだけだった。

「……連れて行け」

男の短い指示に後ろに控えていた三人の部下たちの内、二人の騎士がゆっくりと少女に歩み寄る。一瞬気の毒そうに顔をゆがめた二人だったが、感情を押し殺すように一度だけ静かに目を閉じると、少女の手に自分の手を添えてそっと男の服から手を放させる。

「行きましょう。大司教様がお待ちです」

「立てますか？ さあ、私につかまって。ゆっくりでいいですから」

やさしく声をかけ、ゆっくりとした動きで少女を立たせると、二人の騎士は少女を支えるようにして部屋から出て行った。

パタン、という扉の閉まる音とともに部屋の中には沈黙が訪れる。部屋に残ったのは男と、もう一人の部下。その部下の少年だけは先ほどの男の命令には従わず、ただ連れていかれる少女のことを眺

めているだけだった。

男はその少年に向きなおって少年の顔を見つめる。少年がうつむいていたためにその表情をうかがうことはできなかったが、強く握りしめられた拳が少年の今の感情を物語っていた。

男はそれを目に映しながら少年に問いかける。

「なぜ私が命令した時にすぐに動かなかった」

少年はこの男の問いに答えずに沈黙する。

「……どうして、この街の人たちは平然と生贄を差し出すことができるんでしょうか」

長い沈黙の後に絞り出すようにして呟かれた少年の言葉に対し、男は何かを言おうと口をあけたが、何も言わずにその口を閉じる。そしてじっと少年を見つめてから再び静かに口をひらいた。

「ラプランカのことが」

男のこの言葉に少年は はっ、と顔をあげて男を見るが、すぐに強く唇をかみしめてまたうつむいてしまう。

「凶星、か。お前の気持ちはわからないでもない。しかし生贄を神にささげることは街の掟であり、俺たち教会騎士の仕事だ。お前が彼女のために何かできることがあるとすれば、せめてその時が来るまで幸せな時間を過ごさせてやることぐらいしかない」

「……」

「いずれ彼女にもその時が来る。それまでには覚悟を決めておくこ

とだな」

そう言った後しばらく少年のことを眺めていた男だったが、やがてため息をつく、部屋の照明を落として出て行った。

部屋に一人取り残されたマオは暗い部屋の中ゆっくりとその顔を上げる。

「ラプランカ、僕は一体どうすれば……」

悲哀の表情を浮かべながらそう呟いた少年は、迷いを振り払うかのようにして部屋を後にした。

第一話（後書き）

突然ですが私の書く小説は過去から始まるモノが多いです。

そしてこの作品も過去のお話から始まっています。

実際はこれがプロローグみたいなものですね。

本当の物語は次回の第二話から始まると思ってきてかまいません。
ん。

ということで第二話（いつ更新するかわかりませんが）も是非読んでいただけると幸いです。

第二話

穏やかな風が通り抜ける丘の上に、少女の歌声が響き渡る。その澄んだ歌声は風と重なり合い、丘を駆け抜けて空の彼方へと消えてゆく。

少年はその少女が歌っているのを少し離れたところに座って聞いていた。

緩やかなステップを踏んで一人広大な草原で舞い踊る少女の姿は、まさに歌姫と呼ぶにふさわしい可憐な様相をしていた。

まるで少女の想いが詩に溶け込んでいるかのように、それは美しい旋律となって空気を震わせ、少年の心を満たしていく。

やがて最後の詩を紡ぎ終えると、少女はその場で動きを止めて静かに地平線を眺めていた。

しばらく声をかけずにそれを見ていたが、あまり長い時間そうしているとはイミングを見失いそうだな、と少年は腰を上げると少女に向かって歩いていった。

「ラプランカ、やっぱりここにいたのか。家にいなかったからどこに行ったのかと思ったよ」

背後からかけられた声に少女は驚いた顔でこちらを振り返り、しかし声をかけたのが見知った少年だとわかるとやわらかな表情で微笑む。

「マオ、ちょっと歌いたい気分だったんだ。ここだとだれの邪魔にもならずに歌えるから」

「そんな、邪魔だなんて思っていないさ。君の歌を楽しみにしている人だっているんだよ？」

「うん、ありがとう。マオにそう言ってもらえるだけで、私うれしいよ。……ところで、なにかあったの？ 私を探してみたいだけだ」

「いや、特に用事があるわけじゃないんだ。家に帰ったら君がいなかったから、探しに来たんだよ」

探しに来た、といっても実際のところマオは初めからラプランカはここにいと半分わかっていた。

ラプランカがよくこの丘で歌っていることは知っていたし、マオ自身も何度か一緒に来たことがあったからだ。

「そっか……、わざわざごめんね、マオだって騎士のお仕事で疲れているのに」

申し訳なさそうに呟くラプランカに、マオは笑いかける。

「いや、気にしないでいいよ。それよりも君が無事で本当によかった。あまり一人で街からでない方がいいよ。ここはまだ近いところだからいいけど、あんまり遠くに行くと僕でも見つけられないかもしれない」

たとえ行き先がわかっているからといって安心できるというわけではない。

レインタスの街の中は教会がしつかりと取り締まっているので割と治安がいい方なのだが、いったん街から出ると安全性は格段に落ちるのだ。

この丘は門を出てすぐのところにあるので運が良ければ門を見張っている教会の騎士が守ってくれだろうが、それでも危険であることに変わりはないのだ。そんな場所に女の子が一人にいるというのはだから心配するのが当然であろう。

「ありがとう。心配、してくれたんだよね」

「当たり前だろ、そりゃ心配するさ」

マオが迷う暇もなく即答で答えたことにラプランカは嬉しそうに微笑む。

「うん、ほんとにごめんね、次からはちゃんと伝えるようにするね」

「そうだね、今度からここに来る時は僕も誘ってくれると嬉しいな。ラプランカの歌は聞いてるととても落ち着くんだよな」

「えへへ、マオにそう言ってもらえると私もうれしいな。じゃあ、次は一緒に来ようね」

はにかんだ笑みを浮かべるラプランカに、マオも満足そうに頷く。

「それで、どうする？ ラプランカはもう少しここにいいのかい？」

「ううん、今日はもう十分歌ったから。せっかくマオが迎えに来てくれたんだし、帰ろう」

「そっか、じゃあ帰ろうか」

そう言って差し出された右手を、ラプランカは少し驚いたような顔で見つめた。

「うん」

しかしすぐにラプランカは満面の笑みで頷くとその手を握り、二人は並んで街の方へと歩き出す。

寄り添って歩く二人の背後で、夕日が西の地平線に近づこうとしていた。

第三話

マオとラプランカはレレントスの街の出入り口である門のそばに住んでいる。

ここは街の市街地からは外れたところなので、周囲には建物よりも木々のほうが目立っていた。

マオがこの場所に家を建てて、一緒に暮らさないかとラプランカに告げたのがちょうど三年程前のこと。はにかみながら頷いてくれたそのときの彼女の表情をマオは今でも鮮明に覚えている。

幸いラプランカもこの家を気に入ってくれたようで、それから二人での生活が始まった。

買い物など少々不便なところもあるものの、二人はこの静かな生活を気に入っていた。ラプランカにとってはあの丘の近くということもここを気に入っている要因の一つなのかも知れない。

玄関の扉を開けて中に入ると、ラプランカはマオの方へ振り返る。

「ちょっと待っててね、今ごはんの準備するから」

「うん、何か手伝おうか？」

「ううん、大丈夫。マオは休んでいいよ」

そう言うつとラプランカは台所にパタパタと駆けて行った。

その後ろ姿を見送りながらマオは騎士服の上着を脱いでリビングに腰を下ろし、何気なく家の中を見回す。

さほど大きな家ではないのだが、必要最低限の物しか置いていないために中は割と広く感じる。

マオもラプランカもともとあまり多く物を買うタイプの人間で

はなかったし、騎士といっても一般兵でしかないマオ一人の収入では二人で生活するのがやっとで、あまり贅沢はできなかった。

それでも今まで一度も文句を言わずについてきてくれたラプランカにマオは本当に感謝していた。

もつと頑張らないとな、とそんなことをぼんやりと考えていると、ラプランカがリビングに入ってきた。どうやら夕食ができあがったらしい。それを目で追っていくと、彼女は手に持っていた料理をテーブルに並べていく。

「はい、お待たせ。じゃあ、食べよっか」

「うん、いただきます」

マオはまだ湯気の立っている料理を口へと運ぶ。うん、やっぱりおいしい。

すると、マオはラプランカが自分の方をじっと見つめているのに気づいた。顔には少しではあるが不安のような感情がうかがえる。なぜそんな顔をしているのだろう。と思ったところで、瞬時にその理由に思考がいきつく。

「おいしいよ」

おそらくこの一言を待っていたのだろう。笑いかけながらマオがそう言くと、ラプランカはほっ、と安堵のため息をついた。

「よかった。今日はいつもと味付けをかえてみたんだ」

そう言われてみればいつもと少し味が違う気がしなくてもないのか？ とマオは内心で首をかしげる。

「そういえばいつも僕の好みの味付けだよね。ラプランカの好みの味付けって食べたことない気がする」

「うん、いつもはマオの口に合うようにしてたんだけど……。今日は私の好きなようにしてみたんだ。えっと……。ごめんね、やっぱりいつもの方がいいよね」

しゅん、としてしまうラプランカにマオは苦笑を浮かべてしまう。なにもそこまで落ち込むことはないんじゃないだろうか、と。

「うっん、いいんじゃないかな。僕も好きだよ、この味」

事実マオはこの味付けが嫌いじゃなかった。むしろ好きといってもいいレベルにおいしかった。

「そっか、マオと、私って結構似てるんだね。口に合わなかったらどうしようかと思ってた」

苦笑いを浮かべながらそう言ったラプランカにマオは笑いかける。

「君が作ったものでおいしくなかった料理なんてないよ。ラプランカって本当料理うまいよね」

「そんな、それほどでもないよ。私はただマオに喜んでもらえるように、って一生懸命作ってるだけだよ」

ごく自然に出てきたその言葉に、マオはきよとした顔をしてしまう。

ラプランカも言うつもりはなかったのだろう。言った本人も固ま

っていた。しかしそれもわずかの間だけで、みるみるうちにその顔が赤く染まっていく。

「え、あ、ちがつ！ も、もうっ、マオ！ なに言わせるの！」

「ははは、ごめんごめん。でも、そういつてもらえると嬉しいな。ありがとう」

頬を膨らませてそっぽを向くラプランカの姿を見て、マオはくすりと笑う。

ああ、僕は本当に彼女のことが好きなんだな。と、ラプランカの横顔を眺めながらマオは不意にそんなことを考える。

「もう、自分でもびっくりだよ。ねえ、食べよう？ せっかく作ったのに冷めちゃうよ」

まだ頬を染めたまま少し拗ねたような声でラプランカはそう言う。つい本音が口について出てしまった事は別に後悔していない。嘘を言ったわけではないのだし、マオならば言わなくてもわかってくれていると思っている自分があったから。

……が、しかしだからといって面と向かって言うのは恥ずかしかった。

それに、もう一緒に暮らし始めてからずいぶんとたっているが、本音で話し合うのをラプランカはどこかで遠慮している部分があった。彼女自身でもその原因は分かっている。十分すぎるほどに。

それは立場の違い。自分は神の歌姫であり、いつかは生贄として神に捧げられる身、一方マオは生贄を神に捧げるという役目を持つ教会騎士という立場にある。わかってはいるのだ。

—— いつか自分はこの街を、彼のもとを去らなくてはいけない。
しかも、おそらくその役割を担うことになるのは、彼。

神の歌姫の役目を教えられたその時から、いつも頭の片隅にはそんな考えが存在していた。

マオとは幼いころからずっと仲良くしていた。いや、仲良く、という言葉では足りないくらいには自分は彼に心を許している。そのことを嬉しいと、心地よいと思っっている自分がいることも、それぐらいは自覚している。そしてこれからもずっとそうありたいとも思っている。それは、きつとおそらく彼も……

しかし、それを二人の立場は許さない。自分が神の歌姫である限り、マオとずっと一緒にいたいという願いは叶わない。絶対に、それは叶うことのない願い。

教会騎士と神の歌姫、互いの立場は決して相容れることのないものだけれど、ずっとあなたのそばにすることはできないけれど、だけれど、それでも、と思わずにはいられない。

せめてその時が、最後の時が訪れるまでの間だけでいいですから、

ずっと、あなたのそばにいさせてください

第三話（後書き）

なんだか後半で視点がめちゃくちゃになってる気が……
ああ、文章力のない自分が恨めしい。

ということ（どいうことだ！）、なにはともあれ第三話掲載
しました。

歌詞の上ではまだまだ導入部分ですが、これからよろしく読んで
やってください。

第四話

「あれ？ おかしいな、確かここにあったはずなんだけど……」

正午過ぎ頃、少し遅めの昼食を取ろうと台所に立っていたラプランカのそんな声が聞こえてきて、リビングで本を呼んでいたマオが顔をあげる。

マオは呼んでいた本にしおりを挟むと、台所へと顔をのぞかせた。するとラプランカは食材や調味料の保管してある棚の中に半身をつつこんでゴソゴソと何かを探しているようだった。

「どうかした？ 何か探し物？」

マオがそう声をかけるとラプランカは手を止めてマオの方へと顔を向ける。

「あ、うん。ちょっと調味料がなくなってたみたいで。この前買ったのがここに置いてあったはずなんだけど、見つからなくて」

そう言うラプランカはまた棚の中を探し始める。

「手伝おうか？」

「ううん、大丈夫だよ。あ、ごめんね、ご飯もうちょっと待ってね」

しばらくそうして棚の中を漁っていたラプランカだったが、おかしいなあ、あれがないとおいしくならないよ……、と呟きながら小さくため息をついて立ち上がるとマオに申し分けなさそうな顔を向ける。

「ごめんね、ちゃんと確認してればよかったのに……」

しゅん、としてしまったラプランカにマオは気にするな、と言うような笑顔を浮かべる。

「いや、別にそこまで落ち込むことじゃないよ。そういうこともたまにはあるって」

「ありがと。でも、お昼ご飯はどうしよう……」

ラプランカのその言葉にマオは考え込むようにして顎に手を当てる。

「うーん、どうしようか……。そうだ、せつかくだし外で食べない？ どうせ買物もしくちゃいけないだし」

「うん、そうだね。本当にごめんね。今度から気をつけるから」

「いって、ラプランカだったまには休んだり息抜きしたりした方がいいよ。いっつも一生懸命やってくれてるんだから、ね？」

マオの励ましの言葉に、まだ若干かたいものの、ラプランカは頬をゆるめてはにかむ。その反応にマオは満足そうに頷くと、コートを取りに行くために台所をでていった。

マオの姿が見えなくなったところで、ラプランカは左腕を右手でぎゅっと握る。

その表情は、悲痛

唇をかみしめ、暗い瞳をその左腕に向ける。

「ラプランカー、行くよー」

マオの自分と呼ぶ声にラプランカはハッと我に帰る。

「ちょっと待って、いま支度するから」

そしてもう一度ちらりと左腕に視線を向けた後、暗い考えを振り払うかのように頭を振って台所を後にした。

第四話（後書き）

今回はちょっと短いですね。

その代わりに次回が長い予定です。

第五話 ？（前書き）

誠に勝手ながら長いので二つに切らせていただきます。
中途半端なところで切ってしまうて申し訳ありません。

第五話 ？

「はい、まいどありー。今後是非ともごひいきにねー」

店の主人の声を背中にマオとラプランカは店の扉を開けて外に出る。目的のものをすべて買いそろえた二人は、少し他の店も見て回ることにした。

「そういえば二人でこうやって歩くのも久しぶりだね」

ラプランカは上機嫌に鼻歌を歌いながらマオの隣を歩いている。

「そうだね、最近あまり時間が取れてなかったから。あの丘でラプランカの歌を聴くのもいいけど、たまにはこうやって見て回るのもいいかもね」

そう言いながら、マオは周囲を見回す。

レインタスの中心部に位置するこの商店街はいつきてもかなりのにぎわいを見せていた。

どこの店に目を向けても店内には客がいて、暇そうにしている店は一軒もなかった。

「それにしても、相変わらず活気のある街だね。ラプランカは何か見たいものとかある？」

ラプランカはマオのその問いに少し考えるようにした後、

「うーん、これって言うのではないかな。マオは何か見たいものとかないの？」

「そうだね、僕は特にないよ。しかし、困ったな……。いざ来てみたはいけど、なにも見るものがないんじゃないね」

「ううん、そんなことないよ。私はマオとこうやって見て回ってるだけで十分楽しいから。でも、そうだね、じゃあマオのお勧めのお店とかってないの？」

「お勧めの店？ うーん、僕は普段武器の手入れぐらいでしかここに来ないから。ラプランカの気に入りそうな店って言われても知らないんだよね。……あ、あの店なら」

何か思いいたる所があつた様子のマオにラプランカは顔を向ける。

「あの店？ なにかいいところあつた？」

「うん、一つだけ知つてるところがある。ちょっとした装飾品、まあ、アクセサリーとかを売つてるところなんだけど、ラプランカが気に入ってくれるかどうかはちょっと自信ないな」

「いいよ、行つてみよ？ 実際に見てみないと分かんないし、マオの行きつけのお店ってちょっとと興味あるな」

「行きつけってわけでもないんだけどね。じゃあ、とりあえず行つてみようか。こっちだよ」

そういうと、マオはきよろきよろと周りを見回しながら歩き出した。ラプランカもその後ろを見失わないようについていく。

そうしてしばらく歩いた時、マオは一軒の店の前で立ち止まった。この店かな？ と思つてラプランカはその店の外観を見たとたんに

頬をひきつらせた。

「え、っと……、ここ？」

絶句しているラプランカの反応に苦笑を浮かべながらもマオはその質問に答える。

「うん、ちょっと外見はあれだけど、質のいいものを売ってるんだよね。僕も修理した方がいいとは言っただけだね、なかなか首を縦に振ってくれなくてさ」

それを聞きながらラプランカはまだ店の外観を凝したまま固まっていた。

これはちよつとどこらの問題ではないと思う、というのがラプランカの素直な感想だった。

壁の至る所にひびが走り、塗装はほとんど剥がれ落ちてしまってもはやもとは何色だったのかさえわからなくなってしまうている。窓ガラスは割れ、その破片が周囲にそのまま残されていた。代わりのつもりなのか、ガラスのなくなった窓枠には真っ黒の布が張られていて、しかしそれもとどころが破れていて本来の役目を果たしていないように見える。出入り口の扉だけが唯一新品のように傷一つなく残っていたが、周りがそんな惨状なだけにかえって浮いて見えてしまっていた。

お世辞にもまともにやっている店とは思えない佇まいだった。

不安そうな顔をするラプランカを見て、マオは再び苦笑し、傷一つない扉を開けはなった。

「ミーシャ、いるか？」

店の中に入るとマオは大声でそう叫ぶ。しばらく待っていたがなにも反応はかえってこず、二人は顔を見合わせて首をかしげる。

「いないみたいだね」

「いや、そんなことはないはずんだけどな。まったく、やってないなら閉店中の看板出しておけばいいのに」

今度はマオの呟きにラプランカが苦笑する番だった。あの外観を目にして開店中だと思う人がいったい何人いるのだろう、と。

「ミーシャ、いないのか？ …… おかしいな、いつもはこの時間なら店にいるはずなんだけど。ちょっと待っててくれる？ 奥を見に来るから」

「うん、じゃあ、この辺を見てるね」

マオはミーシャの名前を呼びながら店の奥へと入っていく。ラプランカはそれにはついて行かず、店の中を見て回ることにした。

店の中は照明がついていなかったが、割れた窓から言ってくる日光のおかげで、——店自体が狭いという理由もあるのだろうが

——十分とは言えないがそれなりの明るさを保っていた。

その店には指輪やネックレス、ブローチやブレスレットなどが壁に取り付けられた棚の上に並べられていた。

丁寧に手入れされたのであろうそれらはわずかに差し込む日光を反射して美しく輝いている。

なるほど確かにマオの言う通りアクセサリーを扱っている店なのだろう。とラプランカは一人納得する。……外観からはとても想像がつかなかったのだが。

ラプランカがそうやってアクセサリーを眺めていると、なにか奥の方から人の話し声が聞こえてきた。それはだんだんと大きくなっていて、どうやらこっちに近づいてきているらしい事がうかがえた。

店主さん見つかったのかな、とラプランカがマオが消えて行った方を見ると、ちょうど自分の肩ぐらいの身長のこと——年齢も同じくらいだろうか——赤髪の活発そうな少女と口論をしながらマオが出てきたところだった。

「だから、昼寝するなら店の力ぎくらいかけとけて。泥棒が入ったらどうするんだよ」

「マオ君は心配性だなー。こんなオンボロ商店に泥棒なんか入りっこないじゃん」

「いや、それを自分で言うかな。ってそうじゃなくて、不用心にもほどがあるだろうってこと。ミーシャだって女の子なんだから、もう少し自衛意識を持った方がいいって言ってるんだよ」

「えー？　だってそういう時のためにマオ君みたいな教会騎士がいるんじゃない。しっかり私を守ってね！　マオ君」

「あのね、僕だっていつもミーシャのそばにいるわけじゃないんだよ？　」

「あつはつは、そんなのわかってるって。ま、せつかくマオ君が心配してくれてるんだから注意しとくよ。……ところで、そちらはお客様かな？　珍しいね、大抵のお客様はあの外観を見たときに諦めて帰るんだけど」

と言ってミーシャはラプランカの方に目を向ける。

「めったにこないお客さんなんだからもう少し接客に誠意をもった方が……、まあ、それも今更か、僕の時もそんな感じだったしね。紹介するよ、彼女はラプランカ。この前一度話したことあったよね。ほら、一緒に住んでるって」

「ああ、この子が。私はミーシャ、ここの店主、って言っても店って呼べるかどうか怪しいところだけだね。ま、なにはともあれ歓迎するよ。よろしく！」

ケラケラと笑いながら自己紹介をするミーシャに、ラプランカは曖昧な笑みを浮かべた。その横でマオは片手を額に当ててため息をついている。

「あのね、自分の店なんだからもって大事に扱おうよ」

「この店にはこのぐらいがちょうどいいの！ いいじゃん、どうせ客なんか来ないんだからさ」

「いや、だから今その客が来てるんだけど……」

本格的に頭を抱えなくなってきたマオを尻目に、ミーシャはラプランカに笑いかけた。

第五話 ？（後書き）

ここまで読んでくださって本当にありがとうございます。
次回の更新は比較的早めにできと思います。

ブログの方で活動報告や執筆秘話を書いておりますので、よろしければそちらにもお越しく下さい。

それでは、次回『第五話 ？』に続きます。

第五話 ？

「はいはい、冗談はこのくらいにしとこうか！ それで、今日は何の御用かな？ まあ、うちに來たってことはアクセサリーをお探しなんだよね」

「あ、はい。店の中、勝手に見させてもらっただんですけど、いろんな種類があつてびっくりしました。綺麗ですね」

「もちろん！ ネックレス、ピアス、ブレスレット、何でも揃ってるよ！ あ、もしかして指輪の方が好みかな？ マオ君とのエンゲージリングとか」

「え、ち、違いますよ！ 全然そんなじゃないんです。あ、マオその、こ、これは違うんだよ。マオのことが嫌いとかそういうんじゃないくて、えと、あの」

あわあわとマオとミーシャを交互に見ながらうつろたえるラプランカに、ミーシャはニヤニヤと笑みを浮かべる

「あははっ、冗談だよー。もう、初々しいなあ。なんだよマオ君、こんなかわいい子いるんじゃない。もっと早く紹介してくれよなー」

「その反応がいやだったんだよ。連れてきたら絶対からかうじゃないか」

「そんなのあたりまえじゃん。こんなに面白いネタなんて他にないしね」

胸を張ってそう答えるミーシャに、マオはため息をつく。

「ミーシャ、性格悪いよ？」

「あつはつは、それが私だからね。今更変われって言われたって無理な話だよ。もう、マオ君はしつこいなー。しつこい男は嫌われるよ？」

「いや、しつこいって言われても今日はじめて言っただけ……」

げんなりと肩を落とすマオをしり目にミーシャはケラケラと笑う。

「あつはつは！ そうだったっけ？ ま、どっちでもいいよ。それよりラプランカちゃん、うちの店の名前、知ってるかい？」

「そうやって都合が悪くなったらすぐ話をそらすんだから……。で、なんだっけ。店の名前？ そういえば知らないね。なんていう店だったの？」

そんな答えがマオの口からあまりにもあつさりと出てきたので、危うくラプランカはそのまま流してしまふところだった。ラプランカは驚きの表情でマオの方を見る。

「え！ マオこの店の名前知らないの？」

「うん。言われてみれば知らないね。気にしたこともなかったし」

「え、じゃあ名前も知らない店に通ってたの？」

「うん、そういうことになるね」

たいして気にした様子もなくにこりと笑うマオにラプランカは呆れてしまう。そんな彼女にミーシャの言葉はさらにとどめをさす事になった。

「当たり前じゃん、名前なんてないんだから」

「……は？」

「いや、だからそのまんまの意味だって。この店に名前なんてないのさ。まあ、店主の私がつけてないんだから当たり前んだけどね」

あまりに衝撃的な事実二人は開いた口がふさがらなかった。名前のない店など聞いたこともない。

「え、じゃあ宣伝とかする時はどうしてたんですか？」

「うちは宣伝なんか今までしたことないよ。したってどうせお客さんなんか来ないしね」

「でも、僕以外にも他の常連客とか来るんだろう？ その人たちは何も言わないのか？」

「そうだね、基本みんな好きなようによんでるかな。『ミーシャの店』とか『あの店』とか『オンボロ屋敷』とか呼ばれてるみたいだよ。私はこの店がやっていければ名前なんて何でもいいんだけどね」

ミーシャは気にするどころかなぜか誇らしげに胸を張って声をあ

げて笑っている。

「ねえマオ、なんか私この店がよくわからないかも……」

「ごめんラプランカ。僕もここまでひどいとは思ってなかったよ」

呆然とつぶやくラプランカにマオも呆れたような口調でため息をつく。

「なんだよー、そんなに驚くことないだろ。売ってるものはちゃんとしてるんだから別にいいじゃんか。ほら、なんか買っていくんだろっ？　というかサービスするからなんか買っていったよ、な？」

「

「そうだね、ラプランカはなにか欲しいものあった？」

気を取り直して話題を変えることにしたマオはラプランカに話を振る。

「あ、えっと、もうちょっと見てもいい？」

「ん、いいよ。ゆっくり見ていいよ」

頷いて棚の方へと近寄って行ったラプランカの背中を眺めていると、ミーシャが横に移動してきてマオの脇腹を肘でつついてきた。

「なあマオ君、ラプランカちゃんが神の巫女って噂、ホントなのか？」

ラプランカに聞こえないほど小さな声でミーシャはマオに話しか

ける。その声は真剣、というよりは不安や心配といった感情の方が大きく含まれているものだった。

「……うん、事実だよ。ラブランカは神の歌姫、それは間違いない」
そう答えたマオの顔が歪む。マオも頭ではわかつてはいるものの、やはり自分の口で言うのはあまりいい気持ちはしなかった。

「ってことは、あの子もいずれは……」

「そう、そういうことになる。その時は、……多分僕がやらなくちゃいけない」

「そんな…… あの子はあんなにマオ君のことを「ミーシャ、いい」……マオっち？」

ミーシャの言葉を途中で遮ったマオの表情は彼女が見た今までのどの顔よりも真剣なものだった。

「それに、その方が僕もいいと思ってる。知らない人に連れて行かれるよりは、僕がやった方がショックも少ないんじゃないかな」

マオのその言葉にミーシャの目が真剣なものに変わる。口調も今までの明るい感じではなく、わずかに怒りのこもっているようなものに変わっていた。

「マオ、それ、まさか本気で言ってるんじゃないよな。冗談でも言っていないことと悪いことがある。今のは悪い方だぞ」

じつとマオの顔を見つめたまましばらく反応を待った後、再びミ

ーシャは話し始めた。

「答えない、か……。まあいいよな、別にマオが行くわけじゃないんだし。マオ自身は気楽なもんだよ。でもあの子はどうなる？ あの子の気持ちは？ マオはそれを踏みにじるのか？」

楽しそうにアクセサリーを眺めたり手に取ってみたりしているラプランカの背中を見つめながらマオは表情を暗くする。

「そう、だね。そうだ。僕が彼女の気持ちを振り切れるはずがない。こんなにも愛おしいと思ってしまっているんだから」

「だったら「でも」」

マオはミーシャが言おうとしたことをさえぎって続ける。

「でもねミーシャ、僕は騎士なんだ。教会の騎士なんだよ。その職務を放棄することは僕にはできない。ラプランカのためにこの街を捨てるなんていう選択肢はないんだよ。そんなことは許されない。それに僕にそんな勇氣はない。僕にはなにも、なにも出来ないんだよ。」

絞り出すように呟かれたその言葉を最後に二人は沈黙する。ずいぶん長く感じたその沈黙を破ったのはミーシャだった。

「ラプランカちゃんは本当にいい子だよ。まだ会ったばかりだけど、あの子を見てれば誰だってわかるさ。あの子は幸せに生きるべきなんだ。……なのに、なんでよりによって神の歌姫なんだろうね。そんなことって、……そんなのあんまりじゃないか」

「……」

答えないマオにミーシャは大きくため息をつく、思いつきりマオの背中をひっぱたいた。

「だったら、せめてあの子のそばに居てやりなよ。今マオっちにできることはそれぐらいなんだろう？　だったらできることを精一杯やればいい。それはきつとラプランカちゃんにとっても救いになるはずなんだ」

「そう、なのかな」

「そうだよ。ほら、いつまでもめそめそしない！　愛しのラプランカちゃんが待ってるぞ！　ラプランカちゃん、マオ君との結婚指輪は決まったかなー？」

「ち、ちよつとミーシャさん！！　そんなんじゃないですってば！！」

ミーシャはマオの肩をたたくと、顔を赤くしているラプランカの方に歩いていき、隣に並んでアクセサリーの説明を始める。

二人で笑い合っている姿を眺めながら、マオは今までの話を思い出していた。

——　今の僕にできること

決してその数は多くない。それでも、もしそれでラプランカが救われるというのなら、

僕は精一杯、ラプランカのそばにしようと思う

ほかの誰でもない、僕自身が

そうしたいのだから。

第五話 ？（後書き）

ちよつとの間休暇を取ります。詳しい理由はブログの方でお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0688/>

～ 静寂司る魔神の手記 ～

2010年10月10日06時40分発行